

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	府中市子ども発達支援センター（児童発達支援事業）		
○保護者評価実施期間	2024年 10月 15日		～ 令和6年 10月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	40	(回答者数) 38
○従業者評価実施期間	2024年 10月 15日		～ 令和6年 10月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	37	(回答者数) 37
○事業者向け自己評価表作成日	2025年2月10日		
★外部機関による訪問調査	2024年12月9日	外部機関	一般社団法人 T S K（第三者評価機関）
★自己評価アンケート確認、助言	2024年12月12日		
★自己評価全体の講評	2025年2月27日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子どもの状態像・ニーズに合わせ必要な支援を検討し提供している。	日常の連絡体制を整え、相談が受けやすい状況を作っている。視覚的に分かりやすく、構造化した環境設定を目的に絵カードを使っている。使っている絵カードは、子どものコミュニケーションにも役立っている。	保護者のニーズを取り入れながら、所属集団で経験することが望ましい活動や行事等について、必要な配慮をした上で実施する。また、PDCAサイクルを繰り返し行い、必要な支援の提供に努めていく。提示の方法や理解に合わせた工夫を行い、子どものニーズを拾っていく。
2	療育現場ならではの感覚遊び（感覚統合を目的とした支援）ができる環境が充実している。	子どもによって刺激を求める量と質が異なるため、子どもの様子や状況によって、感覚遊具のスピードや回転のコントロールをしながら活動を行っている。砂や泥遊び、夏のプールの活動のほか、春雨や絵の具を使って、手や足からの感覚入力に役立っている。	常に職員間で情報を共有し、個々に合わせた適切な刺激や活動を提供していく。感覚の過敏や鈍麻など、個々の違いを捉え、遊びの工夫を行い、楽しく心地よい感覚を増やしていく。
3	多職種のチームで発達を支えている。	それぞれの専門性の視点から、クラス職員と一緒に支援プログラムを検討、実施している。クラス担任はじめ、様々な職種の職員が在籍しており、専門的な視点から保護者の相談に応じている。	より質の高い支援提供に向けて、外部研修及び内部研修を実施し、職員の基本的・専門的資質の向上に努め、提供できる支援の充実を目指す。保護者が子どもへの理解を深めてもらうために伝わりやすい表現方法を検討する。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員が増えたこと、送迎車の添乗等で話し合いの時間確保が難しくなったことから、職員間の情報伝達、意思統一が課題となっている。認識の違いがおきやすくなっている。	職員間の認識に相違がある場合のすり合わせが必要。特に子どもの状態や課題の見立てと具体的支援については、職員ひとりひとりが5領域の理解をはじめ、基本的な特性の理解、アセスメント、記録の録り方、本人主体の支援、子ども達の小さな表情の変化・視線・仕草に気付いていけるような観察力を身に着けていきたい。	会議や研修の時間設定や、やり方などを検討する。資質向上に必要なさまざまな研修や、現場での実践を通じて職員の育成に努める。
2	保護者との関係性の構築がしにくい。気軽に悩みを相談したり、保護者同士の交流・情報交換ができる機会が少ない。	保護者との関係作りや、一緒に子どもを育てていく環境をつくりたいが、連絡帳のやり取り中心では伝わりにくいことを痛感している。直接保護者と顔を合わせる機会を増やしたいが、駐車場がないことで来所がしづらいという意見も多く聞かれる。	行事や活動等の内容と実施方法を工夫して、保護者の参加意欲が高まる企画をしたり、気軽に来所しやすい設定を考える。自主送迎や保護者参加プログラムに来所しやすい環境整備について協議を続ける。
3	低年齢児もダイナミックに外遊び・公園遊具を楽しめる場所が近くにないため、外遊びの内容が制限される。	設備的に園庭がなく、砂場や中庭（ベランダ）が北向きのため季節によっては使いづらい。ジャングルジム、ブランコ、滑り台など大きくダイナミックな固定遊具で遊べる公園が近くにない。	室内での運動課題の内容の充実を図る。隣接する防災公園での活動を工夫する。近隣の保育園等との日常的な交流方法の検討、あそび場について情報共有する。